

蓮の頃〔一〕

四 丁 譯

日本の夏の蒸暑さに、あらゆる植物は勢を得て、生長すること驚くばかりの速迅さ。昨日の蕾は今日の花、翌日はちり／＼に

散失せて、たゞ過越方の美しさを偲ぶのみである。さ

れば繪筆とるもの、一向に多忙しく、誠や自然と力競

べ精競べ。若竹の芽は大き

な天門冬の如く生長し、その伸びることの速かさは目

にも見らるゝばかり。筍の若く柔軟なときは、それを

切つて食する、また充分に生長したものは種々の目的

に使用する。竹の用途は筧、花瓶、桶の箍や傘、箒、帽

子、物干竿、煙管の羅字、扇、茶筌、等、擧げ來れば、一頁を費すも猶足りない位である。竹

は實に日本の巧妙な細工物の原料である。竹は多くは高さ二三

十尺程に生長する。中には倭少なものありて小山を縁で覆ふて居るものもあり、また生垣根になるものもある。

夏期の日本の光景は緑色の調和である。暗い松や杉は、かの絢



正會員 森 寅 太 郎 筆

爛たる稻田の最高調からすると、色調の最低調である。(稻田はわれの知る限りでは、最も壯んな緑と思はれる)それで濕地でない地方には、種々な色の變化がある。鎌倉附近の如き、軽い砂地であるから野菜の種々なものがある。甘藷、瓜類、茄子

類、豆類、百合等である、百合花は日本人自身が不思議に賞美するのみならず、

粧飾にも用ゐて居る。日本では嗜好に關する判断のない愚物に對しては、趣味の

規則があるとしてある。これは日本美術家と吉田で一日散策を試みた、此美術家

は彫金家で、富士の諸國から見た圖を半分繪の半分地圖様のものを造る人であつ

た。墓地の灰色の石塔の近くに曼珠砂華が咲いて居る

ので、これは美麗ではないかといふと、友人はいふのに、あれは莫迦花です、それで何故好かないかといへば、たゞ葉がなく

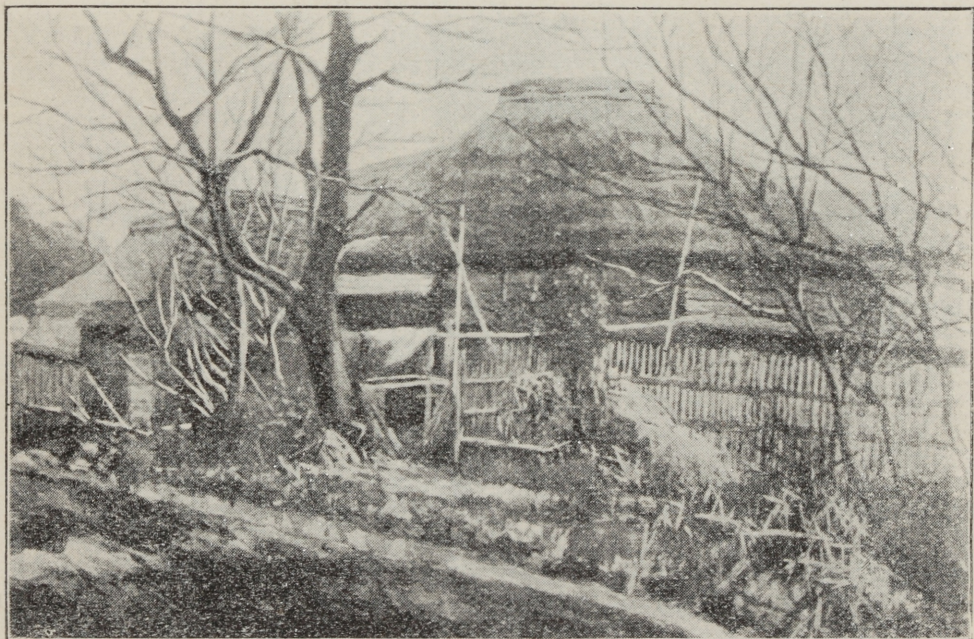
て花が咲くからだといふのであつた。茶屋へ歸つてから、友人は鐵筆と紙とをとつて、秋近き頃の美しい七艸を示された。そ

れは薄、桔梗、朝顔、紫苑、女郎花、菊、萩である。これには

種々の流派があつて、數へ方に多少の差がある。白百合は普通山地に發生する野生のもので、食物とする百合は何んな花であるか終に發見しなかつた。オゲサンがいふには、赤い花が咲く、けれども庭園中を探しても遂に見當らなかつた。鎌倉附近の田舎家の家根は厚く葺いてあつて、屋根の頂に一八艸の附いて居る土が載せてあるで、青い葉がすい／＼と出て、居る。七月頃、その近くによくあるのは紫陽花で、球のやうな花が澤山に咲いて、若い時は蒼い黄な緑の花が、時を経るに従て、鮮な藍色から紫色に變ずる。

△ △ △

新渡部稻造氏曰く、美術の美の字、是は羊の下に大といふ字が書いてある、支那人の思想といふものは恐らく大きな羊を願ふのであらう、日本では餘り見ないが、支那では羊を取つて食ふのであるから何でも大きい方がよい。美の思想とは一寸思はれない、それに反して、獨乙の美といふのは光、光明、若くは輝くといふ意から出てゐる、豚の目方が何斤あるといふのとは譯が違ふ。英でも佛でも皆前のやうな意義から出てゐる。光明といふ語から割出した、若くは思想から割出した美術と、羊の肉何貫目といふ所から割出したのとは現はし方が少し違ふのである。(なでしこ)



水彩畫研究會所四月例會三
藤田紫舟筆